

「氷と火の国」徒然随想

--親日的な島国、環境大国アイスランドから--

在アイスランド臨時代理大使 夏目 勝 弘

1. 溶岩で濾過された美味な水と息を飲むような大自然

2008年3月14日深夜、人口わずか32万人弱、北海道と四国を合わせた程度の大きさの島国、アイスランドのケフラビーク空港に降り立つと、雲間の星々が寒々とした顔で出迎えてくれた。赴任前の情報では冬は長く2~3ヶ月は日照時間が3~4時間ほどしかない、太陽も低く出て低く沈む、鬱病患者も多い陰鬱な国であるとのことであった。また、後述の金融危機で状況は変わるものの、物価は超がつくほど高いという。誠にショッキングな国への赴任であった。米国等一部G8諸国はアイスランドをハードシブの国と分類し、給与、休暇等の福利厚生面で他の先進国より手厚くしているという。OECD加盟国、先進国ということで、一律の対応をとるのではなく、我が国も米国等のように当該国の事情に応じたきめ細かい対応があっても良いのではないだろうか。なお、2年前にポーランドが当地に総領事館を開設したが（当時3万人余りのポーランド人が在住）、鬱病になり自殺するケースが増えたことが主たる理由であると聞いた。

他方、良い面も多々ある。電気料金、光熱費は日本の10分の1程度で、24時間の温水暖房、室内は年中半袖で過ごすことができる。しかもこの電気はほとんどが水力発電と地熱発電によるグリーンエネルギーである。環境大国と言われる所以でもある。

海洋学者によればメキシコ暖流の影響で欧州大陸の平均気温と比べ年間をとおして約15度高いとのことだ。確かに北極圏に近い割にはかなり暖かい。真冬の平均気温もマイナスにならない。かつて在勤したニューヨーク、スイスのジュネーヴ等の方が遙かに寒いと感じる。

また、長い冬の後迎えるアイスランドの夏は大変美しい。

飲料水は地下数百メートルの溶岩が「自然の大濾過装置」となって浄化されるため大変美味しく我が国を含め世界に輸出している。おそらく世界一美味しい水ではないだろうか。

更に、息を飲むような大自然があり夏には1940年代に輸入したアラスカ・ルピアが一面に美しく咲き誇る。漁業国アイスランドでは、魚は種類も豊富でレストランの料理も一般に大変美味である。シシャモ、甘えび、アークティック・チャー等を我が国に輸出している。

世界中から観光客が後を絶たない。観光業は漁業、アルミ精錬、農業等と並ぶ主要産業の一つとなっている。JNTO（日本政府観光局）によればアイスランドを訪れる日本人は過去4、5年間毎年1万人以上にのぼる。今年はそれも後述の火山噴火で状況が一変する。

2. 白夜とオーロラと温泉の軍隊を持たない世界一平和な国

アイスランドは6月から7月にかけて24時間明るい「白夜」が続く。オーロラが大変美しく見える国でもある。また、地熱発電所の余り湯を使った世界一ともいわれる温泉「ブルーラグーン」は大変有名で、シリカという成分で温泉の色は確かにブルー。太陽光線によってはグリーンに見える時もあるという不思議な温泉だ。コンピューターで温度調節をしており、やや熱めが好きな日本人団体客が希望すれば熱く設定してくれるという。

アイスランドはかつては貧しい漁村の国であったが、一時は一人当たり国民所得が世界で5位か6位の豊かな国になり、2年前には「世界一生活し易い国」、「世界一平和な国」とも評価された。NATOの一員として、また米国との安全保障条約により自国防衛を行う軍隊を持たない希な国である。

アイスランドでは過去四半世紀以上にもわたり毎年8月、広島、長崎の原爆記念日にアイスランドの市民グループが中心となり原爆犠牲者慰霊の「灯籠流し（ろうそく流し）」を行っている。このように長期に亘り原爆犠牲者の慰霊を行っているのは日本以外では世界でも例がないのではないかと思う。筆者も参加したが市長や国会議員などが核兵器の悲惨さを訴え、「原爆許すまじ」と挨拶を行っている。

3. 日本はアイスランドの真の「同盟国」

着任半年後の2008年10月、アイスランドは金融危機に陥り世界の焦点になってしまった。

金融立国を目指して来たアイスランドはその金融部門で破綻した。当時ゲイル・ハルデ首相は邦字紙のインタビューにおいて「もう大きな金融セクターを持つことはないだろう」と述べ、80年代から目指していた「金融立国」という国家目標を断念した。2009年2月1日、社会民主同盟と左派緑運動の左派連立政権が誕生、4月25日の総選挙で同政権は歴史的な勝利をした。91年から18年間続いた独立党中心の政治の終焉であった。以下彼等の報道等に基づくが、2008年10月、ワシントンDCでのG7蔵相・中銀総裁会議、その後の緊急金融サミットにおいて、日本政府代表はアイスランドのような国を念頭におき「金融危機に陥っている中小、新興国はIMFをとおして支援すべきである。」「日本はこのためIMFに1,000億米ドルの追加拠出を行う用意がある。」と発言。この額は日本の外貨準備高の約10%に相当するが、この発言がIMFを取り巻く環境を大きく変え、IMFはアイスランドへの融資を決定したと言われる。日本外交の久々の大きな得点であると感じた。事実これを受け、ドミニク・ストロスカール国際通貨基金（IMF）専務理事は、次のような声明を発表した。「日本はIMFに対して最大1,000億ドルの資金提供を実施する用意があるとした。これは、金融・資本市場の安定維持に大きく貢献するものであり、また日本のリーダーシップと多国間協調主義への強いコミットメントを明確に示すものである。」アイスランドでは、国会議員のクリストゥルン・ヘイミズドットイル外務大臣政治顧問（当時）は国営テレビのインタビュー番組で『日本は今やアイスランドの真の同盟国になった。国際社会で大胆にも最初に「アイスランドの問題は世界経済の問題である」と発言した。』と述べた。勿論この同盟は、安全保障上のそれではなく、いわば精神的、経済的友邦とでも言うべき意味合いである。筆者はこの後、アイスランド大学を始め3つの大学で講演、この発言を引用して「日本、アイスランドの真の同盟国」と題し、拝金主義から人道主義、人道的競争へのパラダイムシフトの重要性等を訴えた。

4. 日本と多くの共通性を持った親日国

今年はその追い打ちをかけるかのように、エイヤヒャトラユークルトという舌を噛みそうな名前の火山の爆発・噴火で世界中を騒然とさせた。この噴火による自国の経済への打撃は農業、観光業を始め甚大であったが、世界的にも航空業を中心に大きな損害を与えた。有毒物質の含まれた火山灰を浴びながら国民はいつ大規模な噴火があるかも知れないと不安に駆られながら毎日を送っている。

筆者が理事を務める日本アイスランド協会の脇田会長の呼びかけでアイスランドの被災者のための義援金を募集し、既に一定の大きさに乗せる義援金が集まり、在京大使をとおして贈呈することになっている。

そんなアイスランドをオノ・ヨーコ女史のイマジニ・ピースタワー（注：2007年10月、故ジョンレノンの遺志を汲みレイキャビク港のビゼー島に建設された。）が、アイスランドに、世界に、平和と幸多かれと昼夜見守っている。日本人として誇りに思う。オノ・ヨーコ女史とは08年10月、ピースタワー点灯式と第4回レノンオノ平和賞（注）授賞のために来氷された際、会食会を主催して懇談したが、年齢を感じさせないエネルギーと人間性の溢れた美しさを感じた。（注：副賞は5万米ドル。2002年の第1回より毎回2名ずつ、2年毎に授賞している。）

アイスランドと我が国は多くの共通性、類似性を有している。世界一、二を争う長寿国、温泉好き、火山国、地震、漁業、捕鯨、また、両国ともOECD加盟国の中で数少ないサマータイムを採用していない国である。長寿を反映してか、アイスランドの定年は67歳である。我が国は世界一の長寿国であり、アイスランドのように定年を伸ばせば、天下り問題の解決に大いに貢献するのではないだろうか。

また、興味深いことに家に入る時靴を脱ぐ習慣もある。しかし最も基本的な共通点は、双方ともユーラシアプレートとアメリカプレートを通じた支えとしてその両端に浮かぶ島国であるということだ。筆者は講演等で「アイスランドが悲しんだり、地震で揺れると日本も悲しみ、揺れる」と半ばユーモアを交え両国の共通性を述べている。いみじくも上述のとおり、『日本は国際社会で大胆にも最初に「アイスランドの問題は世界経済の問題である」と発言した。』のはアイスランドの痛みを感じている証左であろう。

5. 「世界言語センター」の中核はアイスランドと日本

アイスランド人は、こうした類似性、共通性から大変親日的な国民でもある。世界初の女性大統領で今年80歳になったヴィグディス・フィンボガドッティル前大統領は現役時代も含め約10回訪日している。「日本文化の奥深さと繊細さは素晴らしい、これは他国にまねが出来ない」とキッパリと言う。同前大統領はアイスランド大学構内に世界の言語・文化の保存、研究等を主な目的とした「世界言語センター」建設プロジェクトを計画しており、ヴィグディス・フィンボガドッティル外国語研究所が中心となり同プロジェクトを推進している。数年後に完成の予定であるが同センターのコンセプトの中核にアイスランドと日本を置くべきであると前大統領は筆者に語った。誰もが中国に注目している中、中国にはない日本文化の普遍性に目をつけた卓見である。アイスランドは欧州の、日本はアジア・太平洋の玄関口になるべきであると。

アイスランド大学では、主要言語が3年間のコース（注：アイスランドでは3年で学位を取得できる）で、大学院までであるところ、日本語コースは2年間のみのコースであるにも拘わらず英語、スペイン語に次ぐ3番目の人気コースである（現在45名在籍）。アニメ、マンガ、Jポップス、ファッション、寿司、源氏

物語や村上春樹等古今の文学、ハイテク技術等日本文化や科学技術と深く結びついた分野から日本に関心を抱くようになってきている。これが日本の誇るソフトパワーであろう。

アイスランド大学は、日本の13の大学と大学間取決を結んでおり活発な交流を行っているが、更に増加する見通しである。2年前、在米の日本人実業家の渡辺利三氏が300万米ドルをアイスランド大学に寄付し、日本とアイスランドの学生、教員のための奨学基金「渡辺信託基金」を設立した。これにより更に交流が拡大される見込みである。

6. 「初代語学大使」として英語教師が日本に赴任

アイスランドの若者の多くは非常に優秀で高校生ともなると立派な大人の考え方を持っている。中学、高校生の多くは放課後アルバイトに精を出す。自分の小遣いは自分で稼ぎ、必要なものは自分で稼いで買う。そこには親に対する甘えはなく自立している。また英語力はネイティブ同然の若者が多い。筆者は当地に赴任して文部科学省の研究留学奨学生や高校生プログラムの面接試験を行う中で、多くの学生の英語が母語同然と感じた。発音はもとより、内容、表現能力、作文能力等、実に舌を巻くほど素晴らしい。我が耳を疑い、当地の米国大使館の臨時代理大使と英国大使館の次席に話したところ、同様に感じていると述べた。筆者の報告を受けた日本アイスランド協会の脇田会長が、ご自身が特命教授を務める埼玉県の西武文理大学の理事長に説明したところ話が進み、当館が支援・仲介する形でアイスランドから初めてのケースとして、アイスランド人女性がこの4月から同大学傘下の西武文理学園小学校で英語教師として勤務している。筆者は同英語教師を「初代語学大使」と呼ぶことにしたが、これはJETプログラムではなく、埼玉西武文理学園の独自の予算で採用したもの。筆者はこの過程で、自治体によってはJETプログラムがそれら自治体の制度に合わない等の理由で必ずしも歓迎されていないことを、はからずも知ることになったがこの問題は別の機会に譲る。

一般の日本人の英語力はご存じのとおりで説明するのとはばかられるところ、家庭教育、学校教育はもとより何よりも国民全体の意識変革が重要と考える。社会全体で英語教育のあり方を真剣に考える必要があると痛感する。

7. 日本アイスランド親善友好の桜並木

アイスランドでは、地球温暖化の影響のせいであろうか、桜が咲くようになった。昨年筆者がレイキャビク市内で桜が咲いているのを見かけ、アイスランド大学のクリスティン・インゴルフスドットイル学長に提案したことが契機となり、アイスランド大学は来年設立100周年を迎える機会に大学の構内に桜並木を作ることとなった。（注：アイスランド大学は人口32万弱の国にして、医学部も有する学生数約1万4千人のマンモス大学。学長は昨年秋「21世紀パートナーシップ促進招聘」で訪日している。）

学長も自宅に桜を植えており、すくすく育っているという。米国ワシントンDCの桜並木は東京市が寄贈し今年98周年を迎えたが「世界最北端の島国に咲く桜並木」として、両国の友好親善に寄与することを期待したい。オノ・ヨーコ女史のイマジン・ピースタワーと共に、日本アイスランド友好親善のシンボルとしての桜並木を世界各国の要人や観光客が鑑賞し、世界に対し平和と友好親善のメッセージを発信することができるのではないだろうか。

